

# 生活困窮状態にある単身男性高齢者 における被援助志向性の特徴

村山陽<sup>1)</sup>, 山崎幸子<sup>2)</sup>, 長谷部雅美<sup>3)</sup>, 高橋知也<sup>1)</sup>, 小林江里香<sup>1)</sup>

- 
- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所
  - 2) 文京学院大学
  - 3) 聖学院大学

# 問題

## 単身高齢者における生活保護受給者の割合の増加 (全受給世帯の約半数にあたる82万世帯)

(2019年7月時点:厚生労働省,2020)

単身男性高齢者は女性に比べて**社会的孤立に陥るリスクが高い**ことが示されており、その予防に向けたアプローチが求められている。

(内閣府,2012;小谷,2017)

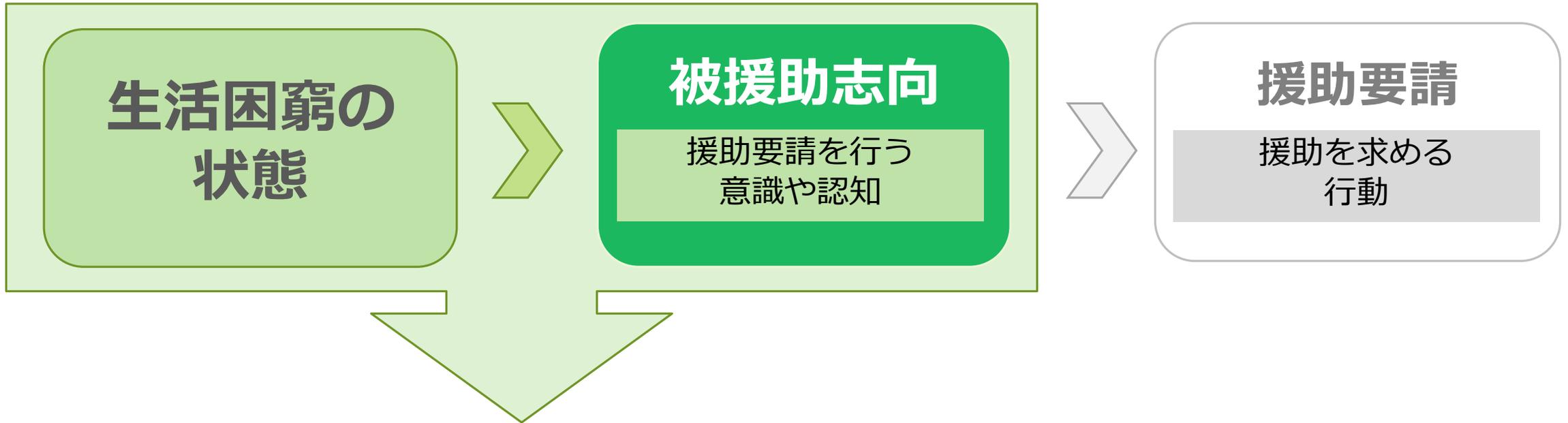
にもかかわらず、

単身男性高齢者は自らの**生活習慣の問題を認識しにくい**ため生活問題の早期把握・支援が遅れる現状

(河野ほか,2009;Andrade et al,2014)

生活困窮に陥っている単身男性高齢者からの援助を促すこと(**援助要請**)が課題

# 目的



生活困窮に陥った単身男性高齢者の**被援助志向**の特徴を明らかにする。

# 方法

## 【調査の実施概要】

都内の養護老人ホームAに措置入所した男性高齢者81人を対象に半構造化面接を行った。その内、入所前に単身であった29名（生活困窮経験者）を分析対象者とした(79.7±5.9歳)。

調査にあたっては、調査の目的、個人情報取り扱いについて説明し、文書にて同意を得た。同意を得た後、インタビュアーが基本情報に関する質問紙について口頭で質問し回答を得た。1回のインタビュー時間は50分程であり、研究協力に同意を得られた上でICレコーダーにより録音した。

本研究は、東京都健康長寿医療センター研究所倫理委員会の承認を受けて実施した(30健イ事第1647号, 受付番号49)。

# 分析の手順

## 【リサーチクエスチョン】

・子どもの頃から今までに経験した困難・困り事と対処過程、家族関係・職業経験



## 【分析方法】

(研究スタッフ3名により実施)

(1) TEMによる分析により、**生活困窮に陥るパターン**を抽出

・他者から助けってもらうことについての考え方



(2) KJ法を参考にしたボトムアップ型の分類により**被援助志向型**を抽出

(3) 「**生活困窮パターン**」と「**被援助志向型**」とのクロス表の作成  
→ 生活困窮と被援助志向との**関連**を検討

# 結果と考察

## 分析対象者の属性

	全体 (n=29)	生活困窮パターン		
		生涯型 (n=9)	離職型 (n=10)	退職型 (n=10)
年齢	79.7 ± 5.9	82.7 ± 5.6	81.4 ± 3.9	75.2 ± 5.6
兄弟数	4.7 ± 2.2	5.0 ± 2.0	4.9 ± 2.3	4.1 ± 2.5
長男	13(44.8)	5(55.6)	4(40.0)	4(40.0)
婚姻状況				
未婚	15(51.7)	6(66.7)	5(50.0)	4(40.0)
離別・別居	12(41.4)	1(11.1)	5(50.0)	6(60.0)
死別	2(6.9)	2(22.2)	0(0.00)	0(0.00)
教育歴				
中卒	18(62.1)	9(100.00)	6(60.0)	3(30.0)
高卒	11(37.9)	0(0.00)	4(40.0)	7(70.0)
出身				
北海道・東北	9(31.0)	4(44.44)	3(30.0)	2(20.0)
関東(東京以外)	10(34.5)	3(33.3)	4(40.0)	3(30.0)
東京	1(3.4)	0(0.0)	0(0.0)	1(10.0)
中部	4(13.8)	1(11.1)	2(20.0)	1(10.0)
中国	2(6.9)	1(11.1)	0(0.0)	1(10.0)
九州・沖縄	3(10.3)	0(0.0)	1(10.0)	2(20.0)

# (1) 生活困窮に至る3パターン

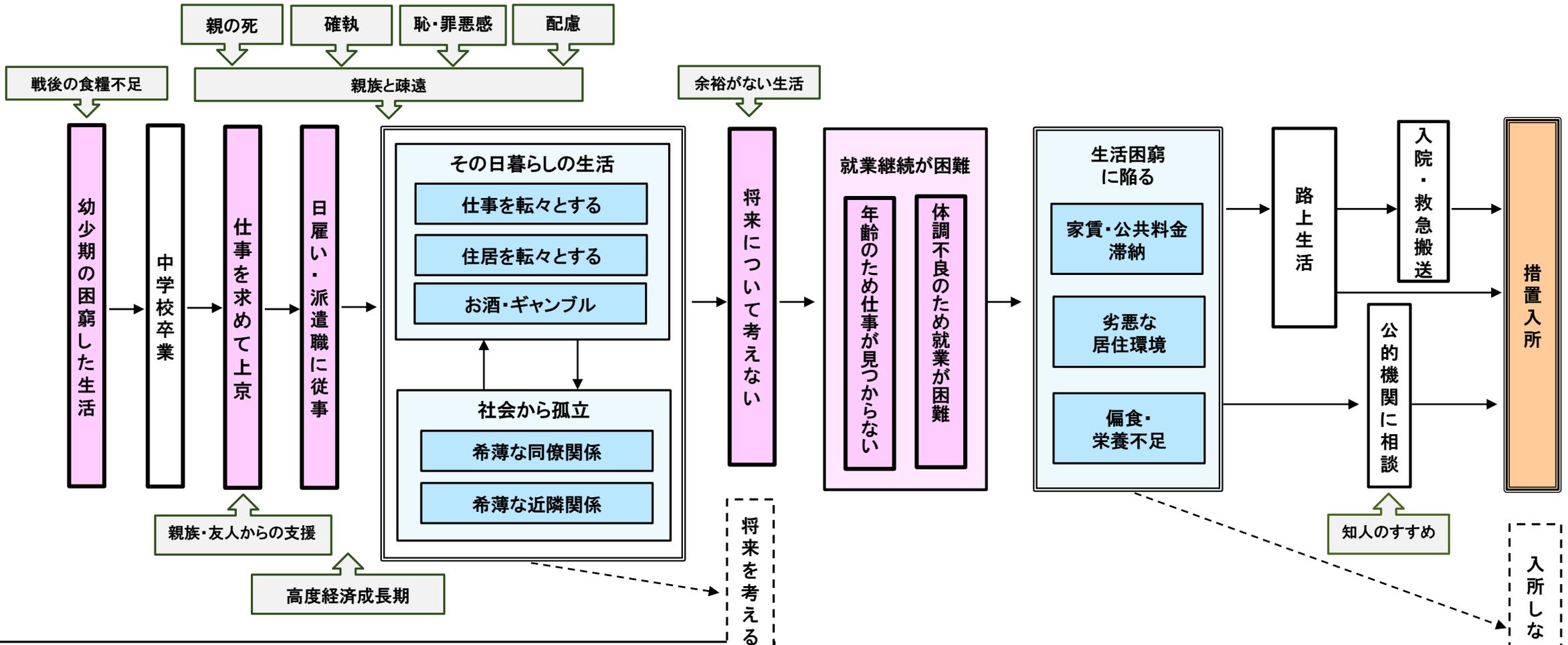
生活困窮に至る過程には3つのパターンが抽出された。

**生涯型 (n=9)**: 幼少期の困窮した生活が高齢期の生活困窮に至るまで一貫して続くパターン

**離職型 (n=11)**: 正規雇用を離職後の不安定な就労状況の中で生活困窮に至るパターン

**退職型 (n=9)**: 退職後の孤独状態での飲酒やギャンブル等から生活困窮に至るパターン

# 生涯型



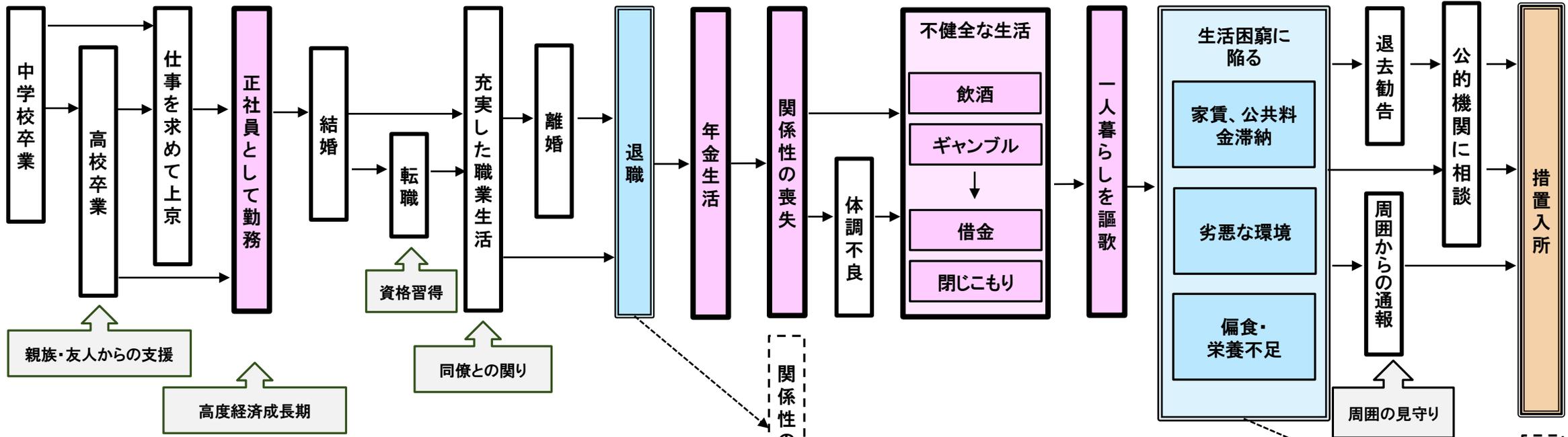
必須通過点	: 多くの人が経験する径路
分岐点	: 径路選択の分かれ道
等至点	: 多様な径路が収束するポイント

社会的ガイド	: 等至点へ至るように働く力
社会的方向づけ	: 等至点から遠ざけるように働く力



# 退職型



必須通過点	: 多くの人が経験する径路
分岐点	: 径路選択の分かれ道
等至点	: 多様な径路が収束するポイント
社会的ガイド	: 等至点へ至るように働く力
社会的方向づけ	: 等至点から遠ざけるように働く力

## (2) 被援助志向の5分類

被援助志向には5つのタイプが抽出された。その中でも**自立型**と**諦め型**が全体の7割程を占めていた。

援助要請に  
消極的

**自立型 (n=12)** : 男性性役割的なスティグマを持ち、困難な状況でも自分で解決したいという志向

**諦め型 (n=8)** : 他者に援助を求めてもどうせ誰も助けてくれないから援助要請はしないという志向

援助要請に  
肯定的

**互助型 (n=3)** : 過去に他者から助け合いの経験があり、他者からの援助に抵抗感はなく、むしろありがたいことと捉える志向

**希求型 (n=2)** : 他者から援助を受けることには障壁はなく、積極的に求めたい志向

**他者志向型 (n=2)** : 他者に援助を求めることはしないが、他者への援助行動には積極的な志向

ただし、**社会的孤立状態**のため援助要請に至らず

# (3) 生活困窮パターンと被援助志向とのクロス表

	生涯型		離職型		退職型	
	n(%)	会話例	n(%)	会話例	n(%)	会話例
自立型 (n=12)	4(44.4)	(助けてもらうことは)そりゃあ嫌だよな。みっともないもんな(J:80代,未婚)	5(50.0)	他人から助けてもらうとか、援助を受けようという、まあ人を当てにすることはよくないことだよ。大体これ、だって他人から助けてもらうんでしょ(O:80代,離・死別)	3(30.0)	おじいちゃん、おばあちゃんに言われたのは、おまえ一人だから一人で強く生きていかなきゃだめだって言われたの(R:70代,離・死別)
諦め型 (n=8)	5(55.6)	親とか兄弟、自分たちの生活あるから、誰も大人もこうして(助けて)はくれなかったな。それはまあ、どっちが悪いんだか、いいか悪いか言えねえけどよ(U:80代,未婚)	2(20.0)	誰も助けてくれない。ははは。助けてくれない(…)他人、あてにならないよ(E:80代,未婚)	1(10.0)	俺は昔からやっぱり人を助ける人いないなって思ってるから。こっちは子供のころから貧乏してても、だって誰も助けてくれなかったから(Q:70代,離・死別)
互助型 (n=8)	—	—	2(20.0)	お互い様だからさ。助けたり助けられたりするのね。人生だってどこに何があるか、一寸先は闇だっていうことあるでしょう(S:70代,離・死別)	1(10.0)	それ(互助)は普通だと思うよ、お互いに困っているんだから。働いていけばね。どこでもそうだよ。(…)働いていてお互いそうじゃない、助け合いはそれが常識でしょう。それだけは守ってやってきたからね(B:70代,未婚)
希求型 (n=3)	—	—	—	—	2(20.0)	弱いから、気持ちが(…)お金とかそういうのでなくて、気持ちの面だよな。助けてもらいたいよね(M:70代,離・死別)
他者志向型 (n=2)	—	—	—	—	2(20.0)	自分のことで人に助けてもらおうとか、そういうあれはなかったですね。やっぱり格好つけマンだったから。みんなね、困った顔してどうしたらいいか、金銭面でも仕事でも困った奴はみんなうちに来てたから(T:70代,離・死別)
不明 (n=2)	—	—	1(10.0)	—	1(10.0)	—

# 生活困窮パターンと被援助志向との関連

## 生涯型 → 諦め型

過去に援助要請が**失敗**した体験（「幼少期の困窮した生活」）が語られた。失敗経験により構築された認知的枠組みが援助要請を抑制する一因になっている可能性を示唆

## 離職型・退職型 → 互助型

職場での互助体験が語られた。自分の援助を他者から**感謝**された経験の語りが特徴的であり、感謝された体験が互助型の志向の形成につながったと考えられる。

## 退職型 → 他者志向型・希求型

友人や同僚への援助体験が語られた。他者志向型には他者への共感的な態度、希求型には積極的に援助を求めたい姿勢が示された。ただし、周囲に**サポート資源がない**ため援助要請に至っていない。

## 総合考察

- 生活困窮状態における単身男性高齢者の被援助志向には、それまでの **ライフコース** との関連が認められた。
- ◇ 援助要請に消極的なタイプは、自立型と諦め型があった。
  - ・自立型：**男性性役割的**
  - ・諦め型：過去の援助要請の**失敗体験**
- ◇ 少数ではあるが援助要請に肯定的な志向タイプも認められた。  
ただし、中年期以降は**社会的孤立**状態にあり援助要請には至っていない。

生活困窮状態にある単身男性高齢者の援助要請を促すには、より早い時期から**社会関係**を構築し、それを通して**現状把握**や**将来展望**を進める取組が重要であると思われる。

## 引用・参考文献

・厚生労働省:被保護者調査(令和元年7月分概数)

(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/hihogosya/m2019/07.html>, 2020.7.2)(2019).

・内閣府:平成24年版男女共同参画白書

([http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h24/zentai/html/honpen/b1\\_s05\\_01.html](http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h24/zentai/html/honpen/b1_s05_01.html), 2020.4.1)(2012).

・小谷みどり: 孤立する男性独居高齢者の現状. 保健師ジャーナル, 73:378-383(2017).

・河野あゆみ, 田高悦子, 岡本双美子, ほか: 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題; 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析, 日本公衆衛生雑誌, 56 (9):662-673(2009).

・Andrade LH, Alonso J, Mneimneh Z, et al. : Barriers to mental health treatment; results from the WHO World Mental Health surveys. *Psychological Medicine*, 44(6):1303-1317 (2014).